

道

愛情の記録
波多野勤子

文藝春秋新社刊

波多野勤子

愛情の記録

道

—愛情の記録—

著者略歴

明治38年東京に生る。日本女子大を經、東京文理大卒。文學博士。昭和29年、著書「少年期」により毎日文化賞を受く。都立特別兒童研究所にて特異兒童の相談に預る。波多野完治氏夫人。主な著書：「幼年期」「娘は娘 母は母」etc.

現住所東京都文京区大塚町65

昭和三十三年六月十日 印刷
昭和三十三年六月二十日 發行

定價二六〇圓

著者 波多野勤子

發行者 車谷弘

印刷者 柳川太郎

發行所 文藝春秋新社

萬一落丁亂丁の節はお買求めの書店又は發行所にてお取り換え致します

東京都中央區銀座八ノ四
振替口座東京七八七四三番
製本文印刷 中島製本

目 次

☆ 里 親 7

消えた女の子 33

若い人たちの手紙 39

花嫁學校 51

家風合作 54

姑の夢 56

常識つて? 58

新教育のしわよせ 60

ある生き方 62

女と職業 65

☆ 夫は夫 妻は妻	71
息子の眼	94
あたるも八卦	102
香をきく	106
道 草	109
五人のボーイフレンド	114
宿 六 像	121
手	124
すばらしい駄犬	126
月 夜	132

蛙と毛蟲のおまじない……………138

靴屋さんとYさん……………143

☆子どもの内緒話……………151

子どもと嘘……………158

子どもとコトバ……………164

子どもと色彩……………172

子どもと動物……………183

☆私の書いた遺言状……………191

——成一のノート——

あとがき……………237

道

— 愛情の記録 —

里

親

里　　親

私の小學時代の同級生が兒童相談所にいる。その人からある日突然電話がかかつて四歳の女の子をあずかつてくれないかといつてきた。突然の話でひどいだが、私がつねづね頭のいい女の子の世話をしたがっているのを知っているからのことであろう。「頭のいい子？」私はまっさきにそうきいた。どうせなら大學教育までうけてくれるような人の世話をしたかつたからだ。

「さあ、それは……あなたが御自分でみて下さるのが一番たしかでしょう」私は兎に角行つてみることにした。

その子は一目みてそんなに頭はよくないとわかつた。「知能指數は一〇〇にちよつと足りない位じゃない？」と私がいうと主任さんは頭をかきながら「その通りです。やつぱりわかりますかね」と苦笑した。實は九十六なのでその點で私の望みには適わないが、育ちは悪くないらしいという。それは十月も末でかなり寒い日だつたのに、まだ夏服のままのその子は、おどおどしていたけれど可愛いらしかつた。母には生まれてすぐ別れ、父はこの子がいるために働きに出られないという。

あいにく施設はいつばいですがには入れられないという話をきいて、私はあずかる決心をした。その娘の眼は何かを望んでいる。それは愛情である。母の愛である。「兎に角しばらくおあずかりしてみましよう。施設があくまででもね。お父さんがお働きになるためにもそれは必要でしょうから

—」
女の子は来る前によく父にいきかされてあつたのか、それとも女の子の手が戀しいのか、私に手をひかれてすなおについてきた。夕方だった。「寒くない？」椅子の上に立てひざをして電車の窓から外をみている子の肩に手をかけてきいてやると、「さむいの、でもいまにいいきものきせてくれるお家へいくの」ああ、それは私のことではないか。私はあわててその次の停留場で電車をおりて、洋品店へはいった。女の子の洋服を買ったことがないのでどれにしていかわからない。で女の子が「これがいい」という洋服にきめることにした。うちへ歸るのを待たずその場ですぐ着せかえてみると、子どもの顔はにわかに明るくなり、やせているけれどもやうやう普通の子になつたようだ。私たちの後から黙つてそつとついて歩いてきた父親は、とうとう私の家までついてきた。やつぱり子どもを手離すのが辛いのだろう。でも私の家を見届けて安心したのか門の前までくると聲を出さずに一禮してしずかに戻つていった。女の子に氣がつかれないようにと氣を配っている様子がわかるだけにこつちまで胸がせまる。家の中へはいつたら女の子は急にダンマリになつてしまった。見馴れないあたりの様子が氣になるらしい。「大丈夫よ。皆いい人たちだから。あなたのおうちは

今日からここね」といつてやつたがじつとして動きもしない。そのうちにズルズルと部屋の隅のところへいつてうずくまるように固くなつて坐つてゐる。ちやうど夕食が出来たので、私はその子の手をひいて皆の中に一しよに坐つた。わが家は私たち夫婦に男の子四人、そのほかあずかつてゐる若い女の人が二人で計八人、父と二人きりで生活してきたこの子には随分多人数に見えたことでもあろう。茶ぶ臺には客用が用意されてあつたが、小さい手に大人の茶碗は無理のようだ。そこで私は戸棚を探して四男の幼稚園の時の茶碗をみつけ出し、それに女の子の御飯をよそつてやつた。小さい手にちやうどいいと思つたけれど、女の子は何だか不平そうに最初の大きな茶碗を眺めている。「そつちの方が多いものね」子どもの心はやはり子どもによく通じるらしく小學校二年生の四男が笑いながら言つた。「ああ、そうなの。でもいくつでもお代りしたらいいわねえ」と説明したらやつと安心したのか手を出して食べはじめた。物も言わずにモクモクと食べる。食事の時は黙つてゐるようにしつけられてゐるのだろうか。よく噛むように言われているのであんなに口をもぐもぐさせるのだらうかなどと思ひながら私は女の子の様子を見ていた。ちつともお肉を食べない、「お肉いや？」うんと一つこつくりをして、何もかけない白い御飯だけを口に入れたモクモクと動かしつづける。でもなかなか御飯はへらない。「スープをおあがんなさい」といつてもそつちの方をちよつと見るだけで手をつけない。

やつと一ぜんすんだ時、私は御飯を横において、スープの茶碗を手にもたせてやつた。「すつて

ごらんさない。吸えるでしょ」女の子はしばらくためらっていたがやがて飲みはじめた。でも一口二口飲んだと思つた時「ゲッ」ともどすようにして御膳の上にはき出した。そのもどし方は生理的のものだ。私はハツとした。そのはき方は私に少しまえまでの私を想い出させた。この子は栄養失調でこんなもの食べられないのだ。食べつけないばかりでなく、長く食べないために栄養失調になつて油やタンパクをうけつけないでいるのかも知れない。ちやうど私が終戦頃、そうであつたように。

茶ぶ臺の上に勢よく吐き出したのでみんなはいやな顔をしたけれど私はそれどころではない。「よし、よし、いいのよ。明日からはもつとあなたの好きなものあげましようね」女の子は私の言葉に安心したのか、御飯だけを、ほんとうに御飯だけをいつまでも噛んでいた。

食後私は女の子とおふろへ一しよにはいつた。とてもやせてあばら骨が見える。その上どうしたのか身體にイボがたくさんできている。でもちつとも嫌がらずに身體を洗わせてくれた。一通り身體を洗つた時彼女は股をひらきかげんにし私の方へむいて待つてゐる。どうも股の間を洗つてもらうのを待つてゐるらしい。私は子どもたちが男の子の故もあるが、自分で手が洗えるほどの年頃になると性器は自分で洗わしてきた。だからこんなに大きくなつた子のを洗つてやつたことがない。まして女の子のはまださわつた経験がない。同性だからよさそうなもののに、赤ちゃんからの経験がないと妙にはずかしいものだ。私は困つてしまつた。でも折角女の子がこうして期待している

のに私がそれをしてやらなかつたらわるいだろう。私は意を決して女の子を抱いてやつた。そして彼女の期待通りに丁寧に洗つてやつた。「いつもお父さんが洗つて下さるの？」ときいたら女の子はこつくりした。ずい分面倒のいいお父さんだ。股を洗つてやつたら何だか急に親しみが増したようだ。風呂桶の中で彼女は私のひざにちゃんと乗つておとなしくしている。まるでいままでもこうやつて暮していたみたいだ。たつた先刻まで全くその存在さえも知らなかつた子どもなのにと思ふと不思議だが、裸同士で肌をふれあうことはたしかにお互の壁をとるようだ。

さて食事とお風呂はすんだが、眠るのはどうだろうか。

私のうちへ泊りがつて時々親類や知人の子がやつてくるが、いよいよ寝る時になると急に歸り風を吹かすのがいつものことだ。うちの息子たちも知人のところへ泊りにでかけて、やつぱり眠る頃にもどつてきたことがある。眠る時になつたら父親を戀しがるのではないだろうか。そうしても私は連れていく先をきいておかなかつたからどうしよう。などと取越苦勞をしながら私はそつときいてみた。

「いつも一人でねるの？」またこつくりだ。

おやおや今日の食べるのにも困つていたというのに別にねかせていたとは感心な、と、床をとつてやり、寝まきがないので、この子が新しい服と替えるまで着ていた夏服をきせた。ふとんにはいつた小さい子はもうとつくに眠いはずなのに目をじつと大きくあけて天井をみている。やつぱり寂

しくなつたのだろうか、思いなしか眼がいまにもぬれ涙が出そうだ。きつとお父さんのことを考えているのだ。それなのに、お父さんのことをいわないでいる。それがかえつていじらしい。「お寝み」ともう一ぺんふとんの上からそつとたたいてやつたが、相變らず大きな眼だ。こういう時にはむしろ黙っているより話しあつて、子どもの考えていることがもし私にできる事ならその望み通りにしてやる方がいいかも知れない。そこで私は訊いた。「いつもお父さんはどこにおねんね？」いつものお父さんのようにしてくれる人を待つているかも知れない。「お父さんがいつもおねんねするところにおばちゃん今日はねてあげますね」すると女の子は小さい聲でいつた。「父ちゃんはおつちで姉ちゃんのおふとんに寝るの」

おや、児童相談所での話では失業し一間に親子二人きりで住んでいるということだつたのに、そのお姉ちゃんも誰だろう。お姉ちゃんというから若いにちがいない。若い奥さんができたので、この子が邪魔になつたのだろうか。いやそんなお父さんではないらしかつた。何か複雑な事情がある。何にしろこの子は食物ばかりでなく、いろんな苦勞をしているにちがいない。だから妙に大人びているのだ。そしておどおどしているのだ。そんなこと思つたら急に一層可哀そうになつてきた。「おねんねが少しよにおねんねするわね」と私は女の子のふとんにはいつていつた。こんなにして子どもと寝ることは私は子どもが病氣でもしているときでなければしたことがない。そのほかでは空襲の頃にだけやつたことだ。子どものためにも親のためにもよくないからいつてしなかつたこと